# 弘前城石垣修理

## 第３回
## ～ 100 年前の石垣崩落と修理工事～

△明治29年以降の石垣崩壊（弘前図書館所蔵）
天守が西側に曳屋されているのが分かる。

弘前城本丸の石垣は、明治時代に度々崩落しています。高照神社（高岡）に、天守台下の石垣が崩れた様子を写した１枚の古写真が残されています。明治初期の出来事だと思われますが、詳しい記録は残っていません。

△明治初期の天守台石垣崩壊（高照神社所蔵）

明治 27 年（1894）以降、再び天守台付近の石垣が崩落します。崩れた石垣は、大正４年（1915）までかかって修復されました。修理については、何枚かの古写真からおおよその状況を知ることができます。

崩れた石垣を修理するため、天守は西側へ曳屋（ひきや）されました。曳屋は、弘前市出身の大工棟梁・堀江佐吉の指揮の下に行われました。佐吉は、旧第五十九銀行本店本館（青森銀行記念館）・旧弘前市立図書館など、現在も残る優れた洋風建築を多く手掛けた棟梁として知られています。当時は重機のない時代ですから、滑車やコロ（丸太）を用いて天守を動かしたと思われます。

古写真を見ると、長さ 10 m近い電柱のような丸太を立て、その上の部分に紐状のものを複数巻いて四方より引き合って固定し、滑車を取り付けています。また、天守の下にコロ用の丸太が並べられているようにも見えます。人力で天守が南東隅の天守台まで運ばれ、引き上げられるまでの途中段階を撮影した写真と考えられます。石垣の石材も、ほとんど人力によって積み上げられたことでしょう。

△石垣修理工事の様子（弘前図書館所蔵）、大正４年（1915）ころの撮影

現在、石垣修理のために行われている弘前城本丸の発掘調査では、天守台より北側に 13 mほどの範囲内で、大きさ 20㎝ほどの玉石を多量に含む白色粘土の広がりが確認されています。この粘土層の広がりは、江戸時代に城を造るために盛った土よりも新しく、また、崩れた石垣の石材混入が見られることから、明治～大正の石垣修理の痕跡であると推測されます。調査の進展により、石垣構築に関する新発見が期待されるところです。

△発掘調査で確認された、明治～大正の石垣修理の痕跡

※弘前城本丸石垣修理事業について、詳しくは下記 URL をご覧下さい。
http://www.city.hirosaki.aomori.jp/kanko/shisetsu/park/ishigaki.html
**■問い合わせ先**　公園緑地課弘前城整備活用推進室（弘前公園緑の相談所内、☎ 33・8739）